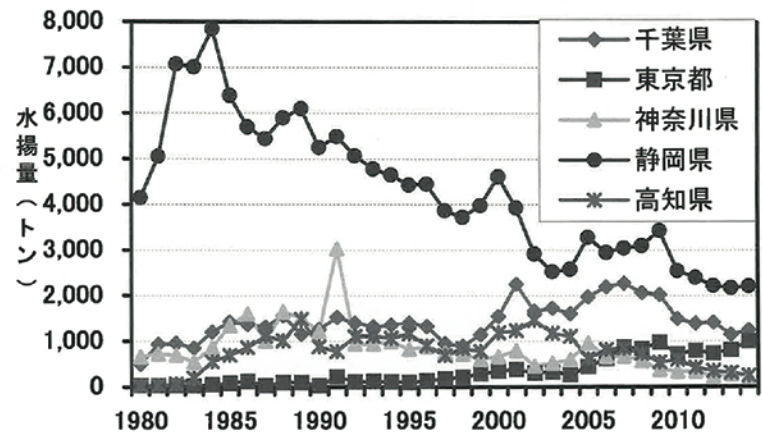


減り続ける金目鯛の漁獲量を回復させる取り組み。

近年、金目鯛の漁獲量は減少しており、2010 年と 2011 年については黒潮の接近通過が一つの原因と考えられました。しかし、調査の結果、金目鯛の資源量自体も減少傾向にあることがわかりました。右図は過去 30 年ほどの一都四県（千葉県、東京都、神奈川県、静岡県、高知県）の金目鯛の水揚げ量グラフですが、最も水揚げ量の多い静岡県でいうと、年々水揚げ量が落ちていくのがわかります。こうした問題に対して、どのような取り組みがなされているのでしょうか。



資料：静岡県水産技術研究所伊豆分場

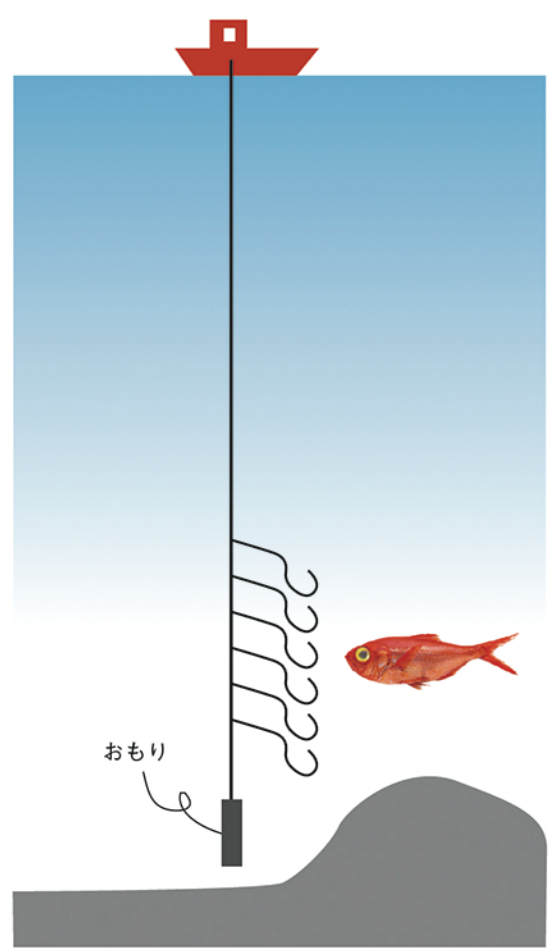
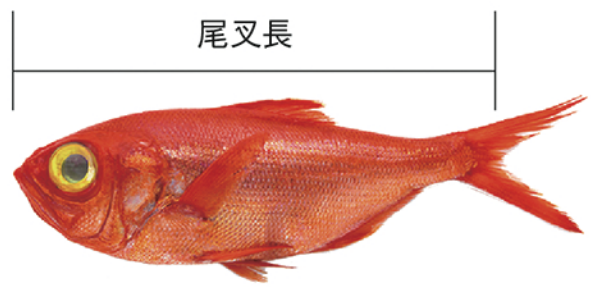
なぜ、金目鯛の漁獲量は減り続けるのか。漁業関係者の取り組みは？

金目鯛の生息域は太平洋、大西洋、インド洋など、世界中の大陸棚、海山などに広く生息しています。

伊豆～銚子の沿岸で、金目鯛に目印等をつけて海に放すと（標識放流）、その多くが放流場所近くで再度捕まわれていますが、一部の魚は、南は八丈島、鳥島周辺、西は高知、奄美大島沖でも再捕されています。

標識放流の結果、金目鯛は、かなり広い範囲を移動する魚でもあることがわかりました。金目鯛は尾叉長（びさちょう・右図）47cm までに成長するのに、およそ 15 年かかると言われています。寿命が長いと言えますが、それだけ成長するまでに時間がかかるとも言えます。問題となっている資源を守っていくためには適切な資源管理が必要です。

静岡県を含む、一都三県（千葉県、東京都、神奈川県、静岡県）の漁業者は、金目鯛の生態の特徴をもとに、各県で定めた「資源管理措置」や各地区の取り組みに従って、小型魚や親魚の保護など、金目鯛資源を永続的に利用するための取り組みを行っています。（下記参照）



図：立縄釣り漁業

『栽培漁業』による金目鯛の新たな可能性。静岡県水産技術研究所伊豆分場に聞きました。

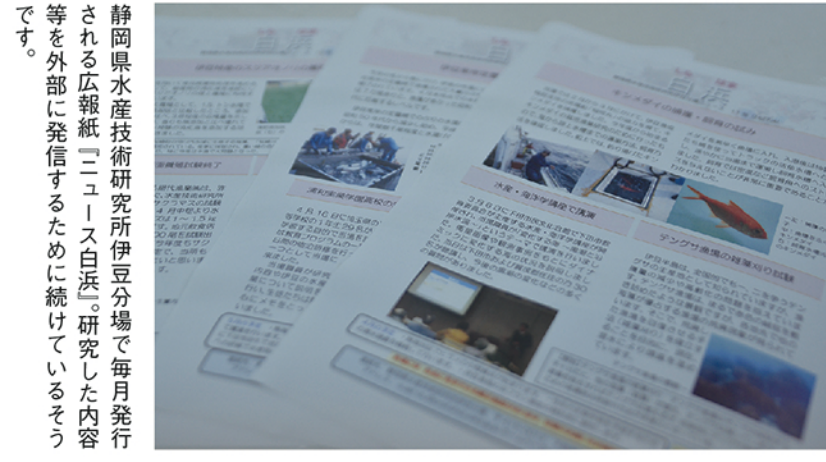
栽培漁業とは、卵から稚魚（ちぎょ）になるまでの一番弱い期間を人間が手をかけて守り育て、無事に外敵から身を守ることができるようになったら、その魚介類が成長するのに適した海に放流し、自然の海で成長したものを漁獲することです。

静岡県水産技術研究所伊豆分場では、今年から金目鯛の栽培漁業の研究に取り組んでいます。これまでに漁獲した金目鯛の海から陸上水槽までの運搬方法、飼育方法を確認しました。船上では、捕獲した金目鯛を素早く魚槽に入れ、入港後は特製のたも網を使ってトラックの活魚水槽へと移し、速やかに当场まで運搬し飼育水槽へ入れました。研究は始まったばかりですが、飼育では密度など飼育魚へのストレスを与えないことが非常に重要であることがわかったそうです。

今後は、卵を孵化させ放流可能な大きさにまで育てる研究に取り組んでいきますが、金目鯛の栽培漁業は前例がなく、現状は大変難しい状況です。今後、金目鯛の栽培漁業によって、漁獲量の減少問題を改善することに期待が集まります。



静岡県水産技術研究所伊豆分場の野田浩之（左）、萩原快次（中央）から金目鯛の栽培漁業について話を聞く小川。



静岡県水産技術研究所伊豆分場で毎月発行される広報紙『ニュース白浜』。研究した内容等を外部に発信するために続けているそうです。

伊豆分場展示室を見学しませんか？

静岡県水産技術研究所伊豆分場は研究棟の隣に展示室を有しています。こちらは平日の日中ならいつでも自由に観覧可能。伊豆海洋生物の解説や、網漁の模型、各種研究の解説などが展示されています。

【時間】8:30～17:00 平日（月～金曜日）※年末年始（12/29～1/3）は除く
【電話】0558-22-0835



展示室夜間開放のお知らせ

毎年開催されている県民の日の特別企画です。伊豆の魚、エビ、カニの水槽展示や標本展示、研究の紹介などがされるほか、タッチプールでは磯生物と触れ合うことができます。

【日時】8月12日（水）・13日（木）17:30～20:30
【場所】静岡県水産技術研究所伊豆分場 下田市白浜 251-1
【電話】0558-22-0835
※小学生以下の方は保護者と一緒に来てください。



静岡県における金目鯛の資源管理に対する取り組み

伊豆東岸と御前崎沖の漁場では、

- 全長 28cm 以下の魚は放流する。
- 水深 200m 以浅の大陸棚では操業しない。
- 夜間操業しない。

静岡県資源管理計画より